

中国研究所理事長より受賞論文の発表および賞状・賞金の授与が行われた。なお、日本現代中国学会の『現代中国』編集委員会は今年度の推薦を見送った。

受賞作品：

◎周俊「中華人民共和国建国前夜における幹部の南下動員に関する考察—華北地域の農村・都市部の比較から」

(『中国研究月報』2019年10月号)

■地域部会報告

□東海部会第14回研究集会

3月7日(土)、愛知大学車道校舎において、東海部会第14回研究集会が開催された。今回の研究集会は新型コロナウイルスの感染拡大が懸念され、全国の学校に政府から休校要請が出された中で開催された。事前に東海部会理事の間で意見交換し、感染拡大防止に十分に配慮した上で、開催することとした。出席者は約20名とふだんよりやや少ない程度で、予定通り4報告が行われ、活発な議論が行われた。

玉置文弥(愛知学院大学大学院文学研究科)「世界紅卍字会と大本教—提携初期の活動と「満蒙」は、関東大震災後の提携から出口王仁三郎の「入蒙」、世界宗教連合会結成までの過程における両団体内部の動向と、その周辺の日中双方の政客・軍人らとの錯綜する関係について論じた。先行研究を踏まえつつ、外交資料など一次資料に基づき実証的に実態を明らかにしようとする意欲的な報告であった。事実確認の質問が続いたが、容易に把握し難い対象だけに、分析視角のいっそうの明確化が望まれる。

川尻文彦(愛知県立大学)「梁啓超「東学」再論」は、梁啓超が摂取した「東学」(明治日本における西洋学)の意義を糸口に、中国近代思想史の方法論的反省を論じた。洋務/変法/革命の三段階論、西洋の衝撃論、「概念」史、「空間論的転換」、「思想連鎖」等、各種の方法論を振り返りつつ、「複数製の近代と文明」「多元性や複雑性」などが今後の研究のキーワードになるという。語り尽くされた感のある梁啓超を論じながら、中国近代思想史の新たな探求の可能性を示唆する報告であった。

李昱(九州工業大学)「中華人民共和国1956年～58年の留学生の選抜—高い質を目指す高等教育部の改革を通して」は、1950年代のソ連留学をめぐる方針転変について報告した。56年に党中央の打ち出した「高い質を目指す選抜方針」にもとづき、高等教育部は選抜方法等の改革を試みるが、反右派闘争の余波で挫折する。ここには学業面の質の確保と工農幹部優先の共産党の教育理念との間で矛盾が存在していたとの指摘がなされた。討論で報告者の分析視角等に関して質問があった。

加治宏基(愛知大学)「東アジアのツーリズムをうごかす中国の政治力学」は、東アジアの越境ツーリズムと国際政治との相互関係を検証した。小泉政権下のビジットジャパン事業の始動から2019年10月の日中合意まで、日本人の対中イメージの好転を図る中国側に対し、日本側は訪日客増加による経済効果を期待するものであり、両国のツーリズム振興は同床異夢であると論じられた。本報告に対し、政治的帰結のアセスメントが必要である、訪日客増加を後追いして政策合意がなされ